

そこで若君は、まづ鳥を懐中に入れて、それから元の木の處へ来て、幹に取つき、幾度も迂り落ちさうに成るのを、やつとの事で攀ち登つて、その巢の側へ来た所で、懐中の子鳥を出して、巢の中へ入れてやるとき、何とも知れず巢の中で、ピカリと光る物が見えた。

不思議に思つて覗き込むと、それは銀の指輪である。

「まアこんな物が……」

と、我知らず取上げたが、よく見れば見るほど、何だか見た事がある様だ。

「……オ、何でもお父さまが此間まで、指に穿めて居らしたのと、丁度おんなじ様だなア。」

と感心して居たが、鳥の子なら鳥の巢に、歸り度いのが道理だけでも、人間の穿める指輪なら、まさか鳥の巢へ歸り度がりもしまい。又お父さまに叱られるかも知れないが、何しろ珍しいから持つて行かうと、子鳥の代りにその

指輪を、改めてお土産にして、又牢屋へ歸つて来た。

「オ、よく歸つて来た。」

「子鳥は無事に返したか？」
と左右からすり寄る時、

「お父さま、お母さま！ 又お土産がありますよ。今度はこんな物！」

と云ひながら出したのを、一ト目見ると大名は、我知らず飛び上つた。

「オ、これこそ私の搜して居る、大切の指輪に相違ない。さうしてこれが何所に在つた？」

「鳥の巢の中に取りました。」

「ナニ、あの子鳥の巢の中に？」

と、思はず聲が高くなると、番人は「何だ、騒々しい！」と睨めつけた。けれども此方は驚かない。これさへあれば萬人力だと、手早く指に穿めて三

度廻すと、ハツと云つて小人が出て来た。
 「さア早く私達を、元の身分に復してくれ！」
 と、云ふが早いか三人は、忽ち元の城へ歸り、それと見て追かけて来た敵には、不思議な小人の加勢が向つて、見る／＼中に討ち亡ぼし、再びこの國はこの大名の手に戻つて、安樂に一生を暮したと云ふ。

口 演 と し て の

指 輪 大 名

小太郎と云つて、或る立派なお大名の若様がありました。至つて氣輕な、何時もニコ／＼してゐる。まことに伶俐な坊ちやんでした。そのお父様も大變い、お大名であつたのですが、唯一つ悪い癖には殺生が好き。殺生と云ひますと生物を殺す事です。毎日／＼鐵砲を持つて、お正月の元日から、暮の大晦日迄、野山を駆け廻つては、ぼん／＼と鳥獸を打つて居る。雨が降つても雪が降つても、雹が降つても……槍が降ると危いから行かないけれども、兎に角毎日出掛ける。御自分はお大名、殿様だからい／＼けれども、お供の家來はたまりません。

そこで小太郎さんが、

「お父さま、そう毎日狩にいらつしやいますと、家來共も難儀致します。どうか是からは三度の所は二度、二度は一度、一度は無しにして下下さいませんか。」

と、云つてお止め申しまして、

「何だ貴様は、子供ぢやないか。生意氣なことを言うな。」

と、言つて、此ことばかりはどうしてもお取上げにならない。そこでお父様は毎日狩に行つていらつしやいましたが、或日どうした事か少しも獲物がありません。と云つてもないのではない。澤山獸や鳥は居るのですが、たゞ弾が當らないのです。かうなると流石に弱つて、

「あゝ、俺の手が鈍つたか、銃が狂つたか。」

と、思ひながら、あせればあせる程道にも迷つて、とう／＼谷川の奥の、道

もない所へ来てしまひました。

「あゝ今日のように當らぬと、狩もつまらんものだなア……第一家來共は何處へ行つたらう。」

と、ブツ／＼つぶやいて居ると、後の方で、

「ヒイ／＼。」

と、云ふ聲がする。何かと思つて銃を取直して見ると、それが鳥でも獸でもない、矢張り人間でした。但し脊の高さは漸く一尺一寸位、白い髭を生じて、赤い頭巾を被つた親爺が、藤蔓でぐる／＼と縛られて、木の根に縛ひつけられて居るのです。兎も角も人間の形をして居ますから、是は撃つ譯には行きません。

「何だ、貴様は……。」

「ハイ、小人でございます。」

「小人は言はぬでも分つて居るが、どうしたんだ？」

「ハイ、私は此方の山の白い髭の小人ですが、向ふの山には黒い髭の小人が居りまして、此間から毎日喧嘩をして居りましたところ、今日はすつかり白が負けまして、私も斯様に縛られてしまひました。」

「ハ、ハ、ハ、白と黒の喧嘩か、まるで碁を打つて居るやうだな。そこで貴様が捕へられたと云ふのか。不惑な奴だ、助けてやらう。」

「有難うございます、あなた様は私の命の親御様でございます。つきましてはどうか之をお禮に……。」

と、言つて、嵌めてゐた腕輪を出しました。

「何だ、貴様の腕輪なんか俺の手にはまるか。」

「お腕には穿りますまいが、お指ならよろしうございませう。」

「成程、貴様の腕輪がおれの指輪か。ハ、ハ、ハ、嵌らぬことはない。併しこんな物は邸に歸れば澤山ある。要らぬぞ。」

「いや、それは只の輪ではございません。不思議な力のある輪でございます。どうかその輪を肌身離さずお持ちを願ひます。」

「フツム、此輪を肌身離さず持つて居るとどんなことがある？」

「くるりと一つ廻して下ださいますれば、何時でも私が出まして、如何なる御用でもお勤め致します。」

「さうか、まるで呼りんのやうな指輪だな。兎に角預つて置かう。」

「就きましては殿様……。」

「まだ用があるか？」

「餘り狩をなさいませんやう……。」

「貴様までそんな事を言ふか。」

「あまり狩がつまみまますので、山の神も、地の神も、皆難儀を致して居ります。どうぞこれからは、一週間に一度と遊ばして下さい。」

「フ、ン、貴様の言ふことは分つて居る。今日のやうに當りが悪いと、狩も面白くないと思つて居つた處ぢや。宜しい、それではこれからは一週間に一度、土曜か日曜と決めて置かう。」

「どうかそのお言葉をお忘れないやうに！」

「俺も男ぢや。一旦うんと言つたら、決して忘れぬぞ。」

「それでは御機嫌よう。」

と、言つたと思ふと、フツと消えてしまつた。

「うゝ、これは不思議なことがあるものだ。今日は何の獲物もなかつたが、小人を助けて妙な輪が手に入つた。兎に角行かう。」

と、思つたが、さて家來共は何處へ行つたか分らない。

「さうだ、いまの小人に聞けば宜かつた。よしためして見やう。」

一つくりりと廻すと、「ハッ」と言ひながら何時の間にか先刻の小人が、前へちやんと現はれて、氣を付けの姿勢で、

「何か御用でございますか。」

「ハ、ア、これは早いな。實は歸らうと思ふのだが、道が分らん。家來共は何處へ行つたか呼んで見て呉れんか。」

「ハイ、かしこまりました。」

と、言つて岩の上の上つて手をかざすと、彼方から三人、此方から三人と、間もなく皆出て来て、

「オ、御前こちらでございましたか。」

「殿様これに居らつしやいましたか。」

「貴様達、何處へ行つて居つたか。」

「殿様こそ何方へ入らしつたかと、随分彼方此方探しましたので……」

「あゝよし／＼、それではもう歸るぞ。」

これからお屋敷へ引上げると大變、今日は當りが悪かつた筈であります。留守の間にえらいことが出来上つた。何かと云ふと奥方が急の御病氣。醫者の藥も到底効かぬと云ふので、家來共は上を下へとわきかへつて心配して居ります。所へ殿様が歸つていらつしやつた。

「殿様大變でございます、今奥方が……」

と、話をすると、

「おゝ、さうか、それは大變ぢや。」

と、言ひながら行かうとする所へ、バタ／＼と駈けて來たのは小太郎さん。

「お父さま、大變々々お母様が。」

「解つてる／＼。」

「大變々々！」

と、すがりつくのを、

「コレ靜かにせんか。」

と、抱きしめると、途端に、

「ハッ！」

と、言つて小人が出て來ました。

「ハテナ、俺は指輪を廻さんのに……さては今この子を抑へる拍子に、獨りで輪が廻つたのだな。それなら丁度よい、實は今奥が急の大病だ。何か藥はないか？」

「それなら御心配は要りませぬ。」

バタ／＼と行つたかと思ふと、何處からか小さい瓶を持つて來て、

「これは命の水と申します。どうかこれを奥方のお口の中へ、三たらしお入

れを願ひます。」

「さうか、それは有難う。」

これを持つて奥へ行くと、奥方は眼を閉ぢ、口を結んで、もう此の世の人とも思はれない有様です。

「成程これはえらい容態だ。」

言ひながら進みよつて、じつと結んだその唇をわつて、今の水をボタリくく、と三たらしたらしたと思ふと、見る見るうちに、菜の葉のやうに青くなつたお顔が、バツとバラ色になつて来る、眼はバチツと開いて星のやうに光り、口はニコリとほころびて、これもさながら花のやうであります。はてはムクムクと起上つて、

「オ、殿様、お歸りでございましたか。」

「うゝ、もうそんなによいのか。」

「はあ、もう何ともございませぬ。」

「いや、これは實に不思議だ。」

小太郎さんは側で手を拍つて、

「やアお母様がお癒りになつた。すつかり良くなつたく嬉しう〜。」

と、おどりあがる。家來共も不思議がつて、

「それにしても、これはまた、不思議なお薬をお持ちでございます。」

「オゝ、これは妙なことでな。實は今日山で小人を助けたのだ。するとこんな不思議な輪を呉れた。つまりぬものだと思つたが、大變重寶なものだぞ。」

と、段々譯を話すと、

「それは善いことをなされました。」

と、皆喜んでゐましたが、

「なほお前方を喜ばせることがある。不斷から心配させたが、これからはそ

の小人と約束をして、狩は一週間に一度と決めたぞよ。」

「ナニ、お狩は一週間に一度、これは又有難いことでございます。やれく明日から樂が出来ます。」

小太郎さんもこれを聞いて、

「一週間に一度なら、これからはぼくも連れて行つて貰へる。」
と、大喜びです。

さてこの指輪のお庇で、奥方の御病氣が癒るばかりか、今まで皆心配して居た狩も、一週間に一度と決りましたから、お屋敷中は俄かに春めいて、その喜びは一通りではありません。

そこでこれからと云ふものは、小人との約束通り、一週間に一度づつ、狩に出て居たのでありましたが、丁度一年程経つた、或る日の事であります。例の狩に出かけますと、これは又不思議によく當ります。

鳥でも獸でも、その目の前に現はれたものは、皆弾に當つてしまふ。あまり當るから、此方が暫く休んでゐると、向ふから駆けて来て、銃口にボウと當つて倒れる、こんな風ですから、忽ち山の様な獲物です。

「殿様、今日はお大獵でお目出度うございます。」

「ウム、愉快だな。狩もかう當るとたまらんわい。」

大喜びで歸りましたが、翌日朝早くから眼を覺して、

「コリヤ家來共、みな仕度をせい〜！」

「へい〜、今日はどちらへ？」

「知れたことだ。昨日の山へ狩に行く。」

「へい、それでは二日続きますが。」

「うゝ二日續いても宜い。後二週間休めば同じ事だ。」

仕方がないからお供をしますと、この日もまたよく當ります。雁が空を竿

になつて飛んで行く、後の雁を打とうか、前の雁を打とうか、と思つてゐる中に、ポウンと弾が出た。見るとその弾が、後の雁の尻へ當つて、頭へ抜け又前の雁の尻へ當つて、頭へぬけ、尙前の雁にも抜けて、順々に尻から頭へ尻から頭へと打ちぬいて、到頭十羽の雁を、十羽共唯一發で、バタ／＼と珠數つなぎにしてしまひます。

「いやこれはうまい。ばんざアい。」

斯う云ふ風ですから、この日も同じく山のやうな獲物です。

「愉快ぢやなア。」

「お目出度うございます。」

さてまた三日目の朝になると、同じやうに早く起きて、

「コリヤ／＼、支度だ／＼。」

「ハイ、今日はどちらでございませう？」

「知れたことだ、今一度昨日の山へ……」

「それでは三日續きますが。」

「三日續いてもよいワ。後三週間休めば同じ事だ。」

斯う云はれては又仕方がありません。何しろ殿様の仰しやることですから家來共もしぶ／＼お供をして、この日も山の中を駈け廻つて、相當の獲物はありましたが、さすがに三日續くと、久しぶりですから殿様も少しくたびれてしまひ、

「あゝ愉快だつた。お前方も御苦勞だつたな。では三週間休ませてやるから明日から湯治へでも行つて來い。」

「有難うございます。」

などと言ひながら歸らうとする時、ふと氣が付くと、例の指輪が何處へ行つたか手にありません。

「これは不思議だ。さつき晝飯の時までは確かにあつたが、さては何處かへ取落したか、不斷から少しゆるいとは思つてゐたが。家來共探して來て呉れ！」

「ハア、それでは何處へお落しになりましたか。」

「馬鹿ッ、それが分れば自分で拾ふでないか。無いから探せと云ふのぢや。仕方がないから山中探したが、さてちつとも分らない。そのうちに暗くなつたから、いよ／＼見當りませぬ。その通り殿様に申上ると、

「なにッ、見つからぬと云ふ事があるか。お前方は何の爲に目玉を付けて居る？」

「見る爲につけて居ります。」

「それならなせ見えぬか？」

「あるものなら見えますが、ないものはやつぱり見えませぬ。」

「して見るとよく／＼ないと見えるな。あゝ残念なことをした。併しもともと只で貰つた指輪ぢや。無い昔と諦めればすむ。一年の間重寶をした指輪ぢやが、残念な事をした。イヤ、それでは歸るとしやう。」

こゝで草臥れた足を引ずり／＼、皆屋敷へ歸りまして、風呂へ入つて晩の御飯を食べると、皆綿の様になつて、正體もなく寢てしまいました。

所が隣の國には悪い大名が居て、前からこの國を狙つてゐました。國は豊だし、寶は澤山ある。どうかして乗取り度いと思ふが、この大名は不思議な指輪を持つて居て、之を一つ廻されると、飛行機でも何でも出て來るから、うつかり手が出せなかつた。所がその指輪が今日狩場でなくなつたと云ふことが、はやくも耳に入りましたから、兼ねてから用意した兵隊を直ぐにくり出して、不意に此國へ攻め込んで來ました。此方はもうすつかり疲れ切つてゐる。久し振りに三日つゞきの狩で、家來共はへと／＼になつて寢てゐる。

所へだしぬけの夜討ですから、『ソレツ』とあはて、飛び起きて、皆ねぼけて何の役にも立ちません。靴と間ちがへて、帽子を足に履いたり、巻ゲイトルを頭へ被つて見たり、一つのズボンを二人ではいて、歩かうとして轉んだり、折角馬に乗つたかと思ふと、あへこべに乗つて後へ駆けて見たり、そのうちに敵が乗り込んで来ましたから、今はこれまでと云ふので、御殿の奥の一間に、殿様、奥方、小太郎さん、愈々城を枕に討死と云ふ事になりました。そこへワアツと敵が亂れこみ、それ逃がすなど、三人共縛り上げて『萬歳々々』と勝鬨をあげました。さてこれから親子三人、敵の大將の前に引据ゑられ、今は首を斬られるか、或は遠い島へ流されるかと、覺悟をきめて居ります。すると、

『待て待て、此奴は兎も角も大名と迄言はれた者ぢや。別段科があつた譯ではないが、平生から殺生が好きで、鳥や獸をむごたらしく扱つたと云ふか

ら、その報いとして、これから獸扱ひにしてやれ！』

獸扱ひと云ふから、馬のやうに車を挽くか、牛の様に田を鋤くのかと思ふと、さうでない。丁度山の崖に自然と出来た洞穴がある。その表に格子をつけ、中に荒蓆を敷いて、そこへ親子三人、まるで動物園の態か、虎のやうに一生飼ひ殺しと云ふことになりました。朝晝晩に黒い飯の握つたの、缺けたお椀に水、澤庵の尻尾、梅干の干からびたのと、こんな物で命をつなぐことになつたのであります。その又牢番の老爺と云ふのは、まるで地獄の鬼のやうな奴。これが始終頑張つて居る。斯うなると流石の殿様も髭ボウ、奥方もすつかり瘠せ衰えて、生きて居る勢はありません。

『それだからお止め申して居る間に、お止めになつて下さればよいのに、到頭斯んなことになつてしまひました。』

『あゝ、濟まぬ、勘辨してくれ。おれが小人の約束を破つたばかりに、お前

方にも難儀をかけて面目ない。』
 殿様も涙ぐんで弱り切つてしまひます。所が小太郎さん許りは一向平氣で
 す。

『お父さま、お母さま！そんなに泣いたり悔んだりするものではありませ
 ん。人間と云ふものは、運の好い時はいゝし、悪い時は随分不仕合せなこと
 になります。けれども誠の道を守つて居れば、神様がちやんと見てゐて下さ
 いますから、後にはきつと幸福になりますよ。さア、お父様泣かないで、お
 母様も何かして遊びませう。』

まるであべこべに子が親を慰めてゐる。鬼のやうな牢番の老爺も、普通の
 子供なら恐がるのに、小太郎さんは平氣です。ある日の事、老爺をつかまへ
 て、

『おちさん、この間から言はう／＼と思つてゐたが、おちさんの顔は随分

恐いね。まるで鬼のやうだね。けれども恐いのは顔ばかりで、心は恐くはな
 いでせう。』

『ウン、さう言はれ／＼ばさうだなア。』

『それ御覽、顔は鬼の様に恐くても、心はきつと佛様のやうだと思つて居
 る。』

『あゝさうか。有難いな。』

『あのね、おちさん、彼處に綺麗な花が咲いて居ますね。』

『ウン、咲いてる、咲いてる。』

『スマレかタンポ、か、あれが僕取りたいな。おちさんちよいと開けて呉れ
 ない？』

『駄目々々、お前達は虜と云つて、此處へ押しこめられたら出ることが出来
 ないんだ。花が欲しけりや、俺が取つてやらう。』

「おちさんの、そんな熊手みたいな手で取ると、花が滅茶々々になつてしまふ。いゝおちさんだなア、きつと開けて呉れるよ。」

斯う云はれると流石の老爺も、

「ふん、お前のやうにさう言はれると、開けない譯に行かないな。ではたつた一度だぞ。」

「有難う！」

ヒユウツと出て行つて、草原で花をつんで歸つて來た。

「おちさん、どうも有難う。——お父様、お母様、斯んな綺麗な花があつたので、この間から取りたい取りたいと思つて居たんですが、漸く取つて來ました。さあお父さまの勳章を拵へました。胸へつけて上げませう。お母さまにはかんざしがいゝでせう。」

斯う言はれてお父さまも、お母さまも、またまるで子供のやうになつて、

「どうだ。俺に似合つたか。」

お母様も頭に挿して、

「綺麗でせう。」

と、いつて喜んでゐる。斯うしてその晩はもう泣きも悔みもせずに寝たが、翌る朝半番の老爺が、いつもの通りお辨當を持つて來ると、

「おちさん、どうも昨日は有難うございました。」

「ふん、よかつたな。」

「あの花を持つて歸つて上げたら、お父さまもお母さまも大喜び、いゝおちさんだつて、おちさんのことを褒めてゐましたよ。本當にいゝおちさんだ、あんな人はきつと出世をする、と褒めてゐました。」

「さうか、それは有難いな。」

「だからいゝでせう、もう一遍あけて……」

「うまくおだて、開けさせやうとするな。」

「だつておちさん、いくら出してもらつたつて、僕はちやんと歸つて來ますよ。お父さま、お母さまもいらつしやるのだから、此所より外へ行くもんですか。ですからもう一遍あけて下さい。」

「いけないい〜。」

「あゝわかつた。僕が見てるといけないんでせう。ちやア、此方をむいてます。ソラ、いゝおちさんが、あけて呉れます。いまあけてくれまアす。」と、云ふと、老爺もそれに釣りに込まれて、

「そんならあけまアす。」

と、あけてしまつた。あいたと思つたらヒユウツと行つてしまつた。草原を通り越すと綺麗な小川がある。小川には水がチヨロ〜流れて、下には小石が澤山ある。

「今日はこの石を拾つて行かう。」

石を拾つてハンケチに包んで歸つて來た。

「お父様、お母様、あの今日は川へ行つて斯んなものを拾つて來ました。」
見ると白、青、赤、いろ／＼な小石です。

「何だ、そんな小石をどうするのだ。」

「この石でね、何かして遊びませう待つて下さいよ。お手玉を取るといゝけれども、お手玉はお父様にむづかしいから、——あゝおはじきがいゝ。おはじきをしませう。」

「おはじきとは何だ。」

「おはじきはネ！斯うして石と石とをコツン！コツンと當てるのです。」

「ふウん、そんなら俺にも出来るだらう。コツン、コツン。」

「あゝ、お父さまは駄目だ。ちつとも當らない。今度はお母さまの番だ。」

「では」コツン／＼！

「今度は僕の番……」

斯うして三人がまるで子供のやうにおはじきをして遊んでゐる。殿様も奥方も、その晩又泣きも悔みもしないで居りました。

さて三日目になると、また牢番の老爺の來るのを待ちかねて、小太郎さんは、

「お早う、おちさん！」

「ウン、お早う。」

「おちさん、昨日はネ、あの石でおはじきをして面白かつたよ。」

「面白そうだつたな。」

「今度おちさんも入れたげやうね。」

「ウン、入れてもらはうな。」

「そこでね、おちさん！」

「何だ？」

「二度あることは三度あるつて言ひますね。」

「さう言ふなア。」

「三度目の正直つて云ひますね。」

「ウン、さうも言ふよ。」

「何でも、いゝことは三つですね。お正月が三が日、お盆も三つ組。」

「さうだ／＼。」

「だからいゝでせう。」

「何がいゝんだ？」

「もう一遍あけて下ださいな！ 今日で丁度三度目ですから。」

「何を言ふかと思つたら、此奴油断がならんな。いかん／＼。さう出してゐ

る所を、上の役人に見つかり、おちさんが叱られるは。』

「僕があやまつてあげる。』

「馬鹿を言ふな。』

「それぢやようござんす。僕は昨日までよく見てたから知つてる。——ソレ斯うして斯う……」(トあける手つきをする。)

「うゝん、さうぢやない、斯うだ斯うだ。」(おなじく)

と、云ふうちに、老爺はうつかりあけてしまった。所を小太郎はヒユウツと出てしまった。

「オヤ／＼、早い奴だ。まるで小鳥の逃げるやうだ。』

老爺は呆れて見送つてゐる。此方は小太郎、今日は川を渡つて森の中へ来た。

森には木が澤山あつて、木の上には小鳥がさへづり、下の草原を蝶々が舞

つて、何とも云へない好い景色です。小太郎は我知らずあちこち遊び歩いて居るうち、

「あゝ遅くなつた、歸らう／＼。所で何かお土産はないかな、蝶々を捕へてかうか。生物だから仕様がな、仕方がないから手ぶらで歸らう。』

急いで歸らうとすると、丁度通り掛つた木の下の所で、急にギヤツ／＼と云ふ聲がする。何だらうと思つて見ると、生れて間もない鳥の子です。まだ羽も生え揃つてゐない、うぶ毛のモヂヤ／＼した鳥の子。頭と口が大きくて目斗りギョロ／＼したのが、地へ落ちてバタ／＼もがいてゐます。

「あゝ、あすこの木から落つこちたのだな。あんな高い所に巢がある。待つといで、今彼處へ返して上げるから。』

拾ひ上げてポイと投げたが、羽がきけば直ぐに飛んで歸るのですが、これがまださかないから、またバタ／＼落ちて来る。

「おつと危ない、しつかりしないかい。」
 もう一度投つたが、また落ちて来る。二度やつても三度やつても落ちて来る。

「全體お前のお父さま、お母さまはゐないのかい。オウイ、お前ん所の子が落つこちてるよ。」

と、上を呼んでも返事がない。鳥の子はギアアノノ鳴き立てます。

「それでは仕方がない。此處へ置いておくと、何かに食はれてしまうかも知れない。それでは今日はお土産がないから、丁度これをお土産にしてやろう！」

と、これを懐に入れると、そのまゝ急いで歸つた。

「お父様、お母様、遅くなりました。今日は向ふの森へ行つたんです。いゝ景色だからつい遅くなりました。そこで今日は面白いお土産ですよ。」

懐中から出したのを見ると、鳥の子です。お父様は目を三角にして、

「何だ、それは鳥の子ぢやないか。どうしてそんなものを取つて来た？」

「取つて来たんぢやないんです。拾つて来たんです。僕、可哀想だから育てやるの。」

「なせその巢へ返してやらないのだ？」

「だつて飛べないんですもの。」

「はうつて届かぬのなら、登つて行けばいゝぢやないか。」

「あゝ、さうでしたネ。さうすればよかつたんですけども、たゞ僕、いぢめないからいゝでせう。可愛がつて飼つてやれば……」

「幾ら人間に可愛がられても、鳥の子は鳥の親の側がいゝのだ。例へばお前が天狗か鬼につかまつたとする。それで天狗や鬼がお前を可愛がつて呉れたらどうする。」

「僕はいやだ。幾ら可愛がつて呉れたつて、天狗や鬼なんぞいやです。」
 「それその通りだ。鳥の子はやはり鳥の家がいのだ。いくら可愛がつてやつても、人間の側には居たくないんだぞ。」
 「ちやア仕方がない、返して來ませう。おちさん、濟まないが、もう一遍あけて下さいな！」
 と、小太郎は仕方なしに、老爺に頼みます。老爺は頭をふつて、
 「二度あることは三度……。三度はもうすんでしまつた。」
 「ではもう一遍やりなほし……。」
 「駄目だ駄目だ。」
 と、押問答をしてゐるうちに、殿様と奥方も來て、
 「どうかもう一度丈出してやつてくれ！ さうして呉れさへすれば、この後はどんなことがあつても、私達が決して出しはしないから、どうかもう一度

丈許して呉れ。」
 と、手を合せて云はれますと、流石の老爺も仕方がありません。
 「それでは行つてこい、その代り早く歸つて來るんだぞ。」
 と、又あけて呉れた。その間にヒユウツと駆けて行く。例の小川を渡りかけると、
 「オウイ、何處迄行くんだい？」
 「向ふの森へ行つて返して來るんだ。」
 「そんな遠い所まで行つて返さんでもいゝ。その邊にうつちやつといて、たしかに歸へして來ました。鳥からもよろしくと申しましたと云へばいゝんだ。」
 「いやです。僕はそんな嘘はつきません。」
 ヒユウツと行つて木の下へ來て見ると大變です。上ではギャア／＼狂氣の

やうな聲がして居る。

「ヤア、鳥のお父さまお母さまが歸つて來たな。何だ兩方とも眞黒だから、どつちがお父さまかお母さまか分らないや。オウイ、お前ンの處の子供だらう。さア今返してやるよ。取りにおいで！」

と、云つたが、鳥は元より取りに來られない。下から投げても又落ちて來る。

「ぢや仕方がない待つてろ！ 持つてつてやる。」

鳥の子を懐中に入れて登らうとすると、木を抱へるので、懐中の物がグジヤとつぶれさうになる。

「ヤ、こまつたな。……ウンさうだ、これは懐中に入れるからいけないんだ脊中におんぶしてやらう。オットうごいちやいけない。……あゝ、わきの下へまはるとくすぐつたいよ。」

これからやつと匂ひ登つて行つて、鳥の巢へ戻してやると、親鳥はもう夢中です。彼方へ引つぱり、此方へ引つぱり、人間なら頬ずりをしたり、抱きしめたりする所でせう。

「ハ、ハ、面白いな、鳥だつて斯んなに子を可愛がるんだ。お父さまやお母さまが、僕を可愛がるのは當り前だ。だがネ、鳥、そんなに子供が可愛いのならなせ落したんだい。お前達二人とも出てしまふからいけないんだ。これからはよく氣を付けるんだよ。ではもう行くよ。」

軽い體ですから、歸りは急行です。スル／＼と降りたと思ふと、上でガアと云ふ聲がした。

と、思ふ拍子に、何かヒユウツと飛んで來て、小太郎さんの額にカチンと當りました。

「ア、痛た、オ、痛た。ひどい奴だな。ア、矢張り畜生だ。僕が返しに來て

やつたのを、取りに來たのと間違へたんだな。それにしても痛かつたぞ。』
と、邊を見まはすと、彼方の草の間にピカツと光るものがある。ハツと思つて見ると、これが立派な指輪でした。

「ヤツ、指輪だ！ さてはこれをお禮にくれたのか。」

と、聞いたが、鳥は口がきけないから、さうでございませうと言はぬばかりに
カア／＼鳴いて居ります。

「やれ嬉しや、これさへあればもう大丈夫だ。」

今度はもう嬉しまぎれに、川も何も一足飛び、また／＼間に歸つて來まし
た。

「お父さま、お母さま、確かに返して來ましたよ。」

「まあ宜かつた、御苦勞だつたね。」

「そしたら鳥がお禮を呉れたの。」

「鳥のお禮なんぞどうでもいゝ。」

「所がどうでもよくはありません。これを御覽なさい！」

眼の前に出すと、殿様は驚ろいた。

「あつ、それは指輪だな。どうしたのだ？」

「鳥が返してくれました。」

「鳥が……？ それでは一つ試して見やう。」

これから指輪を指にはめて、クル／＼廻して見ると、その度に、

「ハイ／＼／＼／＼／＼／＼！」

忽ちの間に百人ばかりの小人が、前へズラツと並んで、その前にこの間の

老爺が立ち、

「氣を付けい、番號！」

「一、二、三、四、五……！」

「敬禮！」

ちやんと敬禮をしてから、

「さて殿様、その後は暫らくお目に掛りませんな。」

「お、小人か、濟まなかつた。お前との約束を破つたばかりに、親子三人がこの通りの難儀だ。」

「さうでございましょう。あなたが三日續けて狩に出られましたから、私がこの指輪をお預かりしました。併し今日と云ふ今日は、烏の子をお返し下さいました。また小太郎さんの働きが、如何にも天晴でございましたから、そこで指輪をお返し申しました。さあ、この指輪が返りましたからには、もう何も心配はございません。何でもお望みの通り致しますから、仰しやつて下さい！」

「いや、もうこの上に大した望はない。たゞ元の通りにして貰へばいい。」

と、云うので、そこで再び號令がかつて、

「さア、これからこの牢屋をぶち破つて、お三方を元のお殿へお入れ申せ。すゝめッ！」

と、號令をかけると、今迄一尺一寸の小人が、忽ち七尺七寸になつてしまひ、この勢に牢屋は見る／＼打破れてしまいました。牢番の老爺は吃驚したが、此奴のお庇で小太郎さんが出て貰つたから、その頭を通り越して、忽ち悪い大名を追拂ひ、再び親子三人を元のお城におさめました。やがて小太郎さんの代になると、誰云ふとなく指輪大名……とあがめて、更に此國は榮へに榮へたと云ふ事です。

放送宣話としての

水 地 獄

私は何時も紙の上やら、又演壇の上で御目に掛つてゐるのが、今晚は不思議な御縁で、ラヂオの機械に依つて皆さんの御耳にかゝることになりました。實は御顔が見えぬので、甚だ頼りないことでありますけれども、親しく皆さんの前に出た積りで、是から御話を致しますから、どうか能く御耳を済まして戴きたいと思ひます。

御話の題は今御紹介にありましたやうに、『水地獄』と云ふのであります。大分暖かくなりました此頃に、又水の地獄と云ふ寒いお話をするのは甚だ御氣の毒でありますけれども、暫らく御辛棒を願ひます。時は今から丁度十餘

年程前、日本では大正三年、西洋では千九百十四年と云ふ年であります。此年は世界始まつて以來の大變な騒ぎの起りました年で、言ふまでもなく皆さん御承知の歐羅巴の大戦争が此年に起つたのであります。此戦ひは初めは獨逸が大層強かつたのでした。先づ右に露西亞、左に佛蘭西と云ふ兩大國を相手にし、盛んに暴れ廻つたのであります。佛蘭西の側の白耳義と云ふ小さな國も唯一となぎと云ふ勢ひで、佛蘭西の方に參りました。佛蘭西は五十年程前に一度獨逸から酷い目に合つたのでありますから、今度こそは其仇を討たうと思つて居りました。けれども生憎な事に兵隊が足らぬのであります。獨逸は豫てから斯様な戦をしようと思つて居りますから、軍備は十分に備はつて居りまして、既に佛蘭西の國境まで進んで參りましたが、佛蘭西の方では中々兵隊が足らぬので、忽ち豫備も、後備も召集してしまはれました。後に残る者は皆徴兵検査に落第した者ばかり。手があつても片方がきかぬとか、

足があつても一本短いとか、耳があつてもさつぱり聞えぬとか、眼があつても能く見えない。頭があつても中が空つぽで馬鹿。斯う云ふやうな者が残つて居るばかりでありますから、中々思ふやうに戦が出来なかつたやうであります。丁度佛蘭西のズツと北の方の或る村で、山を一つ越えればもう獨逸と云ふ國境の近くに、一軒の酒屋がありました。酒屋と云つても纏で賣つたり樹で計つて賣つたりする酒屋ではないので、日本で言へば丁度立場茶屋と云ふやうなもので、峠から降りて来た旅人が、汗をふきく一杯やるとか、飯がくひたければ飯もくへる、酒も賣る、夜が更ければ泊つても行けると云ふ酒屋でありました。主人は後備の軍人であつたので、直に召集されてしまひ後に残つたのは十五になる男の子と、十二になる女の子と、八十ばかりになるお婆さんと斯う三人。都合に依つて日本風の名に致します。十五の男の子を太郎吉、十二の女の子をお花さん、お婆さんは、まあ矢張お婆さんとして

置きすが、此三人で、相變らず此店を開いて居りました。所が此村は一番敵國に近いものでありますから、今にも敵が這入つて来やしないかと、村の者は心配して居りますが、まだ味方の兵隊は其處まで来て呉れない。仕方がないから役場の方で心配して、義勇軍を拵へました。義勇公に奉ずると云ふ、まことに名は立派な義勇軍でありますから、實は前にも申します通り、本當の若い強い者は、本當の兵隊に出ましたから、残つて居る者は検査に落第した連中ばかり。併し御國の爲めですから、皆カーキイ色の服を着て、鐵砲、サベルなどを持つた、かひなくしい風をして居りますけれども、其鐵砲とて、本當の武器は皆本當の兵隊が持つて行つて、斯う云ふ連中の持つて居る物は、何處の古道具屋から引張り出して来たかと思ふやうな、皆古い鐵砲でありますから、ガチャと引金を引いても、彈丸が急に出て来ない。忘れた時分明後日頃になつて漸く『ズドン！』

サーベルとても、抜けば玉散ると云ふやうなものではない。
 『おい君一寸先方を持つて呉れ。』
 と、言つて二人が、りりで『どつこいしよ』と引張ると、ガチャ／＼と云つて漸く抜けるやうな赤い刀、兎に角之を持つて三人、五人と隊を組んで村を固めて居りました。

丁度千九百十四年の冬の事。山家の事でありますから、雪が二日も降り續いて、最う一尺四、五寸も積り、大變寒いものでありますから、此義勇軍は皆太郎吉の酒屋に来て、ストーヴの前に腰を据ゑて、お酒を飲んで、段々酔が廻つて来ると、口ばかり偉い事を云ふ。

『オイ／＼獨逸の兵隊が何だ！ 此村に這入つて来て見ろ十人位東にして、頭から鹽を付けて喰つてしまふぞ！』

さう言つて居るかと思ふと、椅子からどたんと落ちて腰が立たない。

『おい花ちゃん助けて呉れ。』

『おちさん駄目よ、御腰が立たないぢやないの。そんな事ぢやお役にならないワ。もうお酒なんか飲まないで、早くお歸りなさい。』

『さうか……それぢやそろ／＼行かう。勘定は此處へ置くぞ、うーい。』

義勇軍のをぢさん達は『お、寒い／＼』と言ひながら、皆外へ出て行きました。丁度此時時計を見ると九時三十分。太郎吉は、

『お婆さんどうしやう。もう少し明けて置かうか。』

『さうだね、もう今夜はお客もあるまい。そろ／＼寝るとしやうよ。』

『それぢやア花ちゃんそつちをたのむよ』と、太郎吉は椅子テーブルをかたづけ、お花は皿やコップを洗ふ。お婆さんは帳場で勘定をする。聽て始末がついたから、寝やうとすると俄に表を『どん／＼／＼』激しく叩く音がする。

『何誰か知りませんが、もう火を落しましたから、御用なら明朝お願ひ致し

ます。」

「何だ、明日の朝まで待つて居られるか、開けろ〜！ 明けなければぶち壊すぞ！」

尙も激しく戸を叩きます。これは變だぞと思ひながら、太郎吉はそつと窓掛けから表を見ると、眞白の雪の中に、眞黒な外套を着た三人の大男が手にく〜長い槍を持つて、『どん〜』戸を叩いて居る。是は豫て繪葉書や、新聞で見た、獨逸の騎兵に相違ありません。太郎吉は胸をドキンとさせたが、そつと婆さんの所に来て小さい聲で、

「お婆さん来たよ、来たよ。」

「何が来たのだ、エ？」

「獨逸の奴が三匹やつて来たよ。」

「三匹つて熊か、狼か？」

「熊見たいな獨逸兵の奴が三匹。寒いからお酒を飲みに来たんだよ。」

是を聞いてお婆さんと、花ちゃんは顔色をかへて、

「どうしませう〜。」

と、泣きさうになりました。太郎吉も怖くないことはないけれど、兎に角も男ですから、此處で自分が弱い事を云つてはと、丹田にうんと力を入れて、度胸を据ゑて、

「いゝよ、此處は僕が引受けるからお婆さんも、花ちゃんも奥に行つて隠れておいで！」

お婆さんはもうがた〜震へて居ります。花ちゃんは、お婆さんを連れて奥に這入り、ベットのの中にもぐり込んで小さくなつて居りました。太郎吉は直表に来て戸を開けますと、待ち兼ねて居た三人はどや〜と這入つて来た。

「主人を出せ、主人を呼べ！」

「こゝに居ます。」

「何處に居るんだ？」

「此處に居ます。」

「何んだ貴様は子供ぢやないか。」

「お父さんが居ないから僕が留守番をして居るんだ。だから僕が主人です。」

「生意氣な奴だ。それぢや番頭を呼べ！」

「そんな者は……居ます。」

「居るなら呼べ！」

「此處に居ます。」

「何だ貴様、主人とか、番頭とか、色々な事言ふ奴だ。」

「だつてお父さんが戦争に出て、僕が留守番をして居れば、主人も、番頭も一人ぢやつて居るんです。」

「それぢや今奥へ行つたのは何だ？」

「あれはお婆さんと子供です。」

「何、婆と子供だ。其婆と子供が油断ならん。婆と云つても髯武者な奴かも知れぬ。子供と言つても六尺位あるか分らぬ。行つて見ろ〜！」

「いけません〜。」

と、太郎吉が止めるのをどや〜と奥へ這入つて見ますと、ベットの白い毛布が高くなつて、まるで雪の降つた日の地震みたい、がた〜震へて居ります。それを見て「是は何だ」と言ひながら、毛布を取つて見ると、中に居たお婆さんと子供が、

「御免なさい〜！」

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛！」

「成程是は子供と婆だ。もう何も外に居らんのか。」

「居ない事はありません。」

「それ見ろ、何處に居る？」

「天井に居る。」

「何だ天井に？」

「鼠が。」

「コラ、此奴馬鹿にするな。鼠なんかどうでもいい。それよりはやく酒を出せ。」

太郎吉は店に来て、早く歸さうと思ふから、有合せのコップに酒を一杯づつ注いで出しました。所が皆さんも御存じであります。獨逸では主に、ビールと云ふ、麥のお酒を飲んで居ります。佛蘭西に參りますと、主に葡萄酒、葡萄酒から採つたお酒を飲んで居ります。太郎吉は其葡萄酒を出したものですから、飲みつけないから、一口飲むと濼い顔して、

「斯んなものが飲めるか。もつと甘い酒を持つて来い。」

と、立上つて其處等にある、長い罎や、角の罎などを、一々明けて飲んで見て、

「イヤ是は酸ばいぞ！　ますいぞ！」

と、探して居りましたが、その中に、フト見ると次の部屋の所から段々小さい穴藏がある。穴藏と云ふものは能く酒の入れてあるものです。側に行つて見ると、中は疊なら五、六枚布かれる所に、大きな樽が三つ、飲み口がつけちやんと置いてある。

「それ見ろ、此處に斯んな好い物がある。」

口を明けて見ると、是は戦争前に取寄せてをいたビールです。獨逸の軍人共は大喜びで、

「サア皆来い〜。」

三人が是からがぶ〜飲み始めた。是を見た太郎吉は、

「ああア、たうとう見付られちやつたか…をぢさん〜！」

「何だ。」

「飲むなら飲んでいゝが、其飲み口をちやんとして下さい。そんなに明けつばなしだと、だら／＼零れて勿體ない。」

「吝な事を言ふな。どうせ錢を拂ふんぢやないから、黙つて見て居ろ！」

子供と年寄ばかりと思ふから、三人の騎兵は馬鹿にして、飲み放題に飲んで居りますが、片方は子供ではありませんが、敵愾心に満ちて居る。口惜しくてたまらない。側にあつたサイダーの空罎を投げてやらうと思つたが、待てよ、今から手出しをすると、相手は大人三人、此方は子供一人ですから、直にひどい目にあつてしまひます。さりとて此儘にして置くのもいま／＼しい。どうしてやらうかと考へて居りましたが、利口な子供ですから、いそいで奥へ来て、

「お婆さん鍵を貸してお呉れ！」

「鍵なんぞ、どうするんだよ。」

「何でもいゝから貸とくれ」と太郎吉はお婆さんの腰に下つて居る、一番大きい鍵をひつたくる様にと、ばた／＼と駈けて来て、穴藏の戸をピーンと締めて外からガチャンと鍵を掛て了つた。

「お婆さん、三匹とも締込んでやつたよ。」

「何だい、何をだい？」

「三人ともネ、穴藏に締込んだんだよ。斯うして置いて、さつきの義勇軍のをちさんと呼んで来て、三人ともふんじばつてしまふのだ。」

花ちゃんも之を聞いて急に元氣がついて、

「そんなら兄さん早く行つて！」

「よし／＼、そんなら行つて来る。」

と、表の方に来ると、槍が立かけてある、ピストルやサーベルも置いてあ

る。

「俺の居ない留守に斯んなものを出すとあぶないから、分捕つて置かう。」

太郎吉はどん／＼集めて奥へしまつてしまつた。まだ戦争の始まらない中に、戦利品をとつてしまつた。かうして太郎吉は表へ出ましたが、是から義勇軍の宿まで行くには、雪の中で大變だナと思つてゐると、幸ひにも好いものがあつた。彼方の木の下にヒン／＼と嘶いて居る、是はさつきの騎兵が乗つて來た馬です。騎兵達は温い思ひをして、甘い酒を飲み、甘いものを喰つてゐるが、馬は寒い雪の中に繋がれて、騎兵ではない不平だからヒン／＼嘶いて居る。太郎吉が外へ出て來ると、三匹の馬は一時に首を出して來た。

「おい／＼そんなに三匹一時に來ても駄目だよ。お前が一番先に首を出したから、お前に乗つてやらう。」

鹿毛の大きい馬をつかまへ漸くの事で鞍の上に乗つて、鞭を一つくれまし

た。馬は寒い所に何時までも立たされて、苦しくて仕様のない所だから、是は好い御客様だとばかり飛び出した。瞬／＼間に村の義勇軍の溜場に參りました。其處で馬をとめて、

「宜いか此處で待つて置いて！ 歸りにも乗つてやるよ。」

ボンと飛降りて、直戸口をトン／＼／＼、

「をちさん開けてお呉れ！」

中にはさつき宜い心持に酔つぱらつて、偉さうな事を言つた連中が、鼻唄を歌つたり、將棋をさしたり、中には居眠りをして居る者もありましたが、戸を叩く音を聞いて、

「誰だ／＼……何だ太郎吉のやうだナ。」

「をちさん開けてお呉れ！」

「太郎吉だナ、勘定はさつき濟ました筈だ。」

「はやく開けてお呉れ！」

「何だ〜。」

キイツと開けると、

「をちさん来たんだ〜。」

「何が、何處に來たんだ？」

「獨逸の奴が三匹家へ飛び込んで今居るのだ。」

「へエ來たか……」

「獨逸の斥候に違ひない。今穴藏の中へ這入つてお酒を飲んで居るから、何處にも逃げやしない。早く行つて捕へてお呉れ！」

義勇軍は顔を見合はせて、

「太郎吉それは本當の兵隊かい。」

「をちさん、玩具の兵隊ぢやないよ。ほんとの生きてる兵隊だよ。」

「それ見ろ、そつちは本當の兵隊だ。此方は皆嘘の兵隊だ。尋常の勝負はでささない。斯んな時は計略でやるのだ。サア皆考へろ〜。」

「さうだな、どうしようか。ウーム。」

「ウーム。」

皆一生懸命に考へ込んだが、暫くすると、

「おいいい事があるぞ。そら此間裏の山を掘つて墜道を拵へる時使つたダイナマイトとか云ふものが、まだ残つて居る。あれはどんな石でも岩でも、木葉微塵になる。あれを一つ持つて來て、穴藏をぶつ壊したらどうだ。」

「いやそれが好い〜。」

「賛成々々。」

「をちさん駄目だよ、そんな事をしては家がこはれて、お婆さんも花ぢやんも死んでしまふぢやないか。」

「さうか、なるほどそれもさうだな。……」

「をぢさん、そんな事を言はないで早く来てお呉れヨ。」

「まあさう急ぐな。何しろそれは年の加減で、疝氣と云ふやつがあるのだが、この寒さで又起つたやうだ。もう少し温つて行くからナ。どうだ外の連中先へ行つて呉れ」

「おれは此間から脚氣が出てるんだ。」

「さう云ふとどうやらさつき喰つた卵が悪かつた故か、どうも鳩尾の所がいやに痛い。」

「困つたナ、おい／＼其處に居るの、居眠しないでお前行つたらどうだ。」

「いやおれは居眠して居るんぢやない。頭が痛くて仕様がななんだ。」

「さうか仕方がないナ。おい太郎吉、折角来て呉れたが、此通り皆病人だ。」

病氣ぢや戦が出来ない。此山を越して二里ばかり行くと、本當の兵隊さんが

居る。其兵隊さんと呼んで来て呉れ。さうしたら後からブラ／＼出かける。」

「なんだ、をぢさん達病氣だつて……其病氣は唯の病氣ぢやないだらう、臆病と云ふ病氣なんだ。よし斯んな奴には頼まない。」

太郎吉は腹立まぎれにその儘外へ出てしまつたが、これから山を越して本當の兵隊の所へ行くには、また随分時間がかゝる。其間に穴藏から獨逸の奴が出て来ると大變だ。どうしよう、行くにも歸るのも出来ないで、太郎吉は馬の上でウロ／＼して居ると、後の方から、

「兄さん——兄さん。」

と、云ふ聲がする。伸び上つて見ると、家に置いて来た花ちゃんが、散し髪で息を切らしながら、

「兄さん大變、大變！」

「何だ穴藏からたうとう出て来たかい？」

「まだ出やしないけど、ドタンバタン暴れ出して今にも出て来やしないかと、お婆さんが心配をして、お念佛を唱へて居るけれども、義勇軍のをちさん達が早く来てくれないと、お念佛の種切れになるから……」

「義勇軍のをちさん達は皆病氣になつたんだよ。」

「ラア兄さん、さつきあんな強い事を云つたのに。」

「さつきはお酒が威張つてたんだ。今は皆病氣になつて、戦が出来ないんだよ。だから今山を越して、本當の兵隊さんと呼んで来やうと思ふんだけど、そんな事しちや時間がかゝるだらう、こまつたなア。」

馬の上の太郎吉と、馬の下に居る花ちゃんは、一緒になつて心配して居りました。

ところが花ちゃん云ふ子も、中々利巧な子ですから、暫く考へて居りましたが、

「兄さん、兄さん好い事がある、一寸降りて！」

馬から降りた太郎吉は、

「何か好い事があるかい？」

「兄さん一寸耳をかして……」

「何だい〜？」

「あの斯うして、あゝして……」

「ウム、ウム、ウム！」

「分つて……？」

「ウム成程。」

「それぢや兄さんすぐ家へ歸つていらつしやい……」

何か二人で相談が纏まりますと、太郎吉は又馬の上に乗つて、雪を蹴つて歸りました。花ちゃんは何をするかと見て居ると、雪の中を走つて行つて、

村の四辻つぎに立つて居る、火の見の梯子はしごの下に來ました。かなり高い梯子はしごです
 が花ちゃんはなちゃんは勢よく、飛びつくと、どん／＼登のぼつて行つて、チャン／＼／＼
 と鳴なりました。雪の夜で邊あたりはしんと静しずまりかへつて居る所ところですからその聲
 がよくひゞく。村むらの者ものもまだ本當ほんとうに寝ねついて居ないから、其中そのうちに家々いえいえの窓まが
 がたく／＼と開いて、

「何處どこだ／＼。」

と、騒さわいで居ります。義勇軍ぎゆうぐんのをぢさん達も、獨逸ドイツの兵隊へいたいの所には、怖こくて
 行いかれなかつたが、火事くわじとなると自分の家うちが焼やけると大變だいへんだから、

「おい火事くわじは何處どこだ／＼？」

と、出でて來る。

かうなると氣きの速はやいのは子供こどもです。半鐘はんしやうを聞くと飛びおきて、

「健けんちゃん、武たけちゃん、火事くわじだ。火事くわじだ？」

「ソレ早はやくポンプ／＼！」

と、直すにポンプを引ひっぱり出だしました。そのポンプと言つても、こんな山家やまがの事
 ですから、蒸氣じやうきポンプと云ふやうな立派りつぱなものではありません。ガタン／＼と
 とやる手押ておしのポンプです。之を出して見みましたが、火ひの一向見いこうけんえませぬ。

「火事くわじは何處どこだ／＼。」

と、半鐘はんしやうの下に行つて見ると、上うへでチャン／＼やつてゐるのが、火ひの番ばんのを
 ぢさんではない、小ちひさい女おんなの子こです、

「なんだいたづらか。オイ半鐘はんしやうを鳴ならしちやいけないヨ。」

と、下したから聲こゑをかけましたが、まだチャン／＼やつて居ります。

「おい、いけないよ／＼！」

幾いくら聲こゑをかけてもまだやつて居る。其中そのうちに長い竿さきで下したからお尻しりをつくと、
 花ちゃんはなちゃんはやつと下したを見みましたが、村中むらぢゆうの者ものが一いパイ出でて、ワイ／＼云いつて

居りますし、ポンプも其處に出て居ますから、

『皆さんどうも御苦勞様。はやく家へ行つてください！』

『なんだ酒屋の子か、お前の家が焼けてるのか？』

『何でもいゝから早く行つてください。いやなら又鳴らします。』

『いや、分つたゝ、ソラ火事は酒屋だ！』

『行けゝ！』

村中の者はポンプをがらゝ引張つて、太郎吉の家まで来て見ると、何處からも煙も出なければ、火も上らない。只太郎吉が立つて出て来て、

『皆様御苦勞様です。』

『冗談ぢやないせ。何處に火事があるんだ、ポンプなんぞ出させて。』

『先刻云つた獨逸の騎兵を、花ちゃんと相談して、是から水責めに仕様と云ふんだ。』

『成程水責めか。うまい事を考へたな。さうすればお婆さんも、花ちゃんも家も壊れない。所で其水は何處にある？』

『彼處に！ 用水があります。あの中へホースを入れて、皆でゴシゝやつて下さい！ 筒先は僕が持ちますから。』

『よしゝそれは面白い。皆やれゝ！』

と、大勢で用水池の氷を割つてその中へホースを入れて、水をどん／＼と吸ひ上げました。筒先を持つた太郎吉は裏へまはつて、明り取りの窓から穴藏をのぞいて見ると、一人は樽にもたれて、鼻から提燈を出して、凱旋行列の夢を見て居る。一人は大の字なりになつてグウ／＼やつて居る。今一人はその上につゝぶして寢言を云つて居る。三人とももう正體はありません。これを見ると太郎吉はまづ其鼻提燈目がけて、筒先を向けたからたまらない。

「ウワツ！ 誰だ俺の顔に水をかけるのは？」
 と、いきなり前に居りました奴の、横面をグワンと殴りました。
 「何をやるッ？」
 と、立上つて殴りかへします。外ではまた、
 「怒つたナ、おこつたら斯してやるぞ」
 又其奴の鼻先に、シユウ／＼水をかけた。
 「何だおれにもかけやがつたナ。」
 と、尙も殴合ひを始めますと、大の字が起き上つて目をこすり／＼、
 「喧嘩はよせ／＼さあ仲直りに一盃飲み直した。」
 「よし飲みたかつたら飲ましてやるゾ。」
 シユウツ／＼、
 「ウワツ、おれにもかけたナ。」

三人が打ちつ、打たれつ殴合つて居ります。外ではポンプで水を出すのが
 面白いから、
 「おい今度はおれにやらせろ！」
 「待て／＼もう少しだ。」
 ガタン／＼／＼。所へ花ちゃんも歸つて来て、
 「私にもやらして頂戴……」
 花ちゃんもブラ下つてガタン／＼ポンプ押をする。今までは念佛を云
 つて居たお婆さんも、もう怖さを忘れてのこ／＼出て来た。
 「ドレ／＼わたしにもやらしてお呉れ！」
 お婆さんまで仲間に入つて、ドシ／＼穴藏へ水をつぎ込む。何しろ三坪
 か其處等の狭い所ですから、水は直溜つて來ます。中の先生サア寒くなつて
 酔ひもすつかりさめてしまひ、

「ウーム酒代は拂ふからもうよして呉れ〜！」

「酒代も何もあるか、ポンプ方ドン〜やつた。」

ガタン〜〜〜！ シュウツ〜〜〜！

「さつきは悪かつた。勘忍して呉れ。」

その中に段々水が増して来る。臍、胸、首、首まで来ると顎髯が浮くやうになつて来た。この上増すとブク〜やつてしまふ。殺しては面白くないから、

「ポンプ方やめッ！」

太郎吉は命令をかけた。ポンプはすつかり止まつた。表に居たポンプ方は、どや〜這入つて穴藏の中をのぞいて見ると、もう水が一杯になつて、眞黒な西瓜のやうなものが、ポカリ〜〜と三つ浮いて居る。

「あれは何だ〜？」

「いや此方を向いたゾ、まだ生きてるのか。」

ワイ〜騒いで居る、太郎吉は、

「納屋に縄があるから、あれを輪にして持つて下さい。」

二、三人で輪を拵へて待つてもらひ、太郎吉は窓からのぞいて、

「サア許してやるから一人づゝ此方へ出て来い。」

喜んで一人が飛出た。所を其縄の輪にかけて首をぎうと締めてしまふ。

「ウワッ！」

之を見た二人目の者は考へた。さうかと言つて出ない譯にも行かない。仕方がないから、勢よく飛出た。勢よく出たから首は助かつたが、今度は胸をぎうと締められて、瓢箪のやうになつた。三人目の奴は、いや是は大變だ。頭から出るとやられるから、仕方がないから尻から出やうと、こは〜足の先を出した所を、グツとしばられて逆さに引張り出した。まるで河岸の鮪のやう。是から前の木の下にく〜りつけて、鼻をつまんだり、耳を引いたり、顎髯を

むしつたりして居たが、借てどうしてよいか分らない。すると、さつきデヤン
 くくく鳴らした鐘の音が、山から山へ木霊して、二里手前の營所の兵隊さ
 んの所に聞えた。何事が起つたゾと一小隊の騎兵が隊長の命令の下に峠を越
 して来て見ると、村中の家が皆明け放しになつて、中は皆カラッポだ。何事か
 分らないが、見ると大勢の足跡が、山の方について居るから、それをつけて行
 つて見ると、太郎吉の家の前にポンプが一臺おいてあつて、むかふの木の下
 に大勢ワイワイいつて居る。そこへ行つて見ると、獨逸の斥候の騎兵が三
 人、唇の色も變つて木にしぼりつけられ、其廻りに義勇軍が立つて居ります。
 『さては獨逸の騎兵は義勇軍が捕へたか？』
 側に居た一人の義勇軍はふりかへつて、
 『へい、私共が捕へました。』
 『さうか、それは感心だ。』

『所が其感心は外にありますので……』
 『何、感心が外にある？ 貴様ではなく外にあるのか？』
 『へエ外にあるんで、オーイ感心々々、出て来て御話をしろ！』
 太郎吉はさきまり悪さうに引込んで居りましたが、かうなると出て來ました。
 『云つてもいいかい。』
 『いゝとも、お前が云はなけりやわからない。』
 『それちや申上げます。私は此處の家の太郎吉と申しまして、お父さんが戦に
 出ましたから、お婆さんと花ちゃん留守番をして居りました。すると夕べ
 此三人がやつて来て、年寄と子供だと思つて馬鹿にして、穴藏に這入つてお酒
 を飲んで居たので、穴藏に鍵をかけて、直義勇軍のをちさんの所へ行きまし
 た。』
 『それから来て捕へたか？』

「いゝえみんな病氣になつてしまひました」
 「オイ〜よせヨ〜！」

「だつてみんな話せつて云ふから御話して居るんだ。皆急にお腹が痛くなつたり、頭が痛くなつたり、疝氣が起つたりなんかして誰も出て呉れないのです。仕方がないから本當の兵隊さん呼びに行かうとすると其處へ花ちゃんやんが來たんです。どうしたらいいか心配していると巧い事考へたんです。花ちゃん……花ちゃん此處からお前お話し！」

「それでは私が申します。一寸其處を見ると半鐘がブラ下つて居ります。此半鐘を鳴らせばきつと村のポンプが出ます。さうしたらポンプを持つて行つて、三人を水責にしたらいと思ひまして、兄さんと相談して、半鐘を鳴らしました。さうしたら村の人が皆出て呉れましたので、やつと水責めにして捕へることが出來ました。どうも火事でないのに、半鐘を鳴らしたり、ポ

ンプを出して濟みません。御免なさい！ 終りッ。」

「成程是は感心だ。好い所に氣が付いた。半鐘は何も火事の時はかり鳴らすものと限つてゐない。又ポンプも火を消すものとは限つて居ない。何でも非常の時は宜しく之を使つても差支へない。これは好い所へ氣が付いた。中々感心な子供達だ。さうすると此義勇軍は唯後から來て捕へたゞけだナ。ウーム、そして其病氣はもう治つたのか？」

「イエ、ハイ、もう治つて居りますか？」

「疝氣はどうした。」

「へイ疝氣も治りました。」

と、大人は皆頭をかけた、が子供は頭を撫でられて、大變賞められました。

さて獨逸の騎兵は此本當の兵隊が引取つて歸りましたが、翌日役場から太郎吉と花ちゃんの所に呼出しが來ました。二人で行つて見ると、司令官から感

謝狀しゃじやうと云ふ書付けと、別に褒美ほうびが出ました。それで此酒屋このまかやは主人が居りませぬでも、司令官しれいぐわんから御褒美を貰もらつた、偉い子供を見に行かうと云ふので、大變たいへんに繁昌はんじやうしたと云ふ事であります。

(終り)

昭和六年三月一日 印刷納本		昭和六年三月三日 初版發行		〔童話の聞かせ方〕 定價 金壹圓八拾錢	
發行者	朝倉鑛造	印刷所	賢文館印刷所	發行者	賢文館
製本所	中島製本工場	賣 捌	東京堂・田口書店・柳原書店・川瀬書店 菊竹金文堂・京都書籍會社・今井書店	發行者	賢文館
發行者	巖谷季雄	發行者	東京市神田區表神保町拾番地	發行者	賢文館
發行者	巖谷季雄	發行者	振替東京五〇八一番	發行者	賢文館

上野陽一著	輓近心理學の重要問題	全一冊	菊一版
稻毛詛風著	教育の本質	全一冊	菊一版
巖谷小波著	桃太郎主義の新教育	全一冊	四六版
椎名龍徳著	無産者教育の主張と實際	全一冊	四六版
山下義韶著	柔道教授法精義	全一冊	菊一版
比企光雄著	暗算研究	全一冊	四六版

小堀春樹著	佐喜濱村を語る	新刊	四六版 函入 價一圓五十錢 送料十錢
飯野哲二著	近松の藝術と人生	再版	四六版 函入 價一圓六十錢 送料十二錢
鈴木敏也著	西鶴の藝術と人生	近刊	

誰しも故郷は懐かしいものである。その懐しい故郷の歴史、地理、物語、奇談等を最も巧みに表現し得たのが本書である。惟ふに生れ故郷に生を受けし者は自分の村を語る資格は誰もが享有する。唯一のものが本書である。若し諸君が本書を見本とし参考として旅人や又は後進者の爲に村の何事も知り得る読みやすき圖書を作らば此の易業である。各村にわがむら話を語るの人は淋しき事であり、わがむら話を語るの書なきは此の上なき不便であらねばならぬ。

本書は從來研究された近松の概論ではなくて、階級觀念の強かつた元祿時代にあつて、人間を本質的に見てゐた「愛の詩人」大近松の内の藝術を再評價する時、必ずやそこに恒久不滅の尊い人間性の厳立してゐる事を見出すであらう。彼の藝術を再評価する時、必ずやそこに恒久不滅の尊い人間性が彼の藝術と人生を味得するに絶好の案内書である。

本書「藝術と人生」の第二冊として近く上梓公刊されるもの、著者は廣島高等師範學校教授として既に學界に令名あり、殊に西鶴研究は著者の獨壇場である。

工 3R 74

目 書 行 發 館 文 賢

著 野 陽 一 上

教 育 能 率 の 根 本 問 題

新 刊

總ての教育能率の根底に國語科が横たはつてゐる。國語科の根底に國字問題が横たはつてゐる。國字問題の議論は多い。しかし何とまぢがひだらけの議論が多いことか、單に國字問題の書としてでも、これだけ理論的に、具體的に論じられた書が、はじめて世に出たことよるこびは、ひとり教育界のみのものでない。しかも國字改良運動の指導者としての著者が、一面において、教育學、心理學、能率學の權威者であることは、あまりに有名である。「教育能率の根本問題」この演題は氏にしてはじめて掲げられ得る、大獅子吼である。

入 函 版 六 四
錢 十 四 圓 二 價 定
錢 八 十 料 送

著 岡 篤 郎

公 民 教 育 概 論 再 版

今日の學校教育も、社會教育も政治、勞働、思想問題に直面して、いよいよ公民教育振興の急務を痛感する様になつた。本書は公民教育の大要を簡明に論じ、青年教育、成人教育等は勿論一般學校に於ける公民教育の趣旨を述べ、その實際的方面を明かにするため、公民訓練、公民科教授法各料との連絡と關係等にいたるまで懇切論及したものである。一般教育指導者にとつて必讀の參考書である。

入 函 版 菊
錢 十 八 圓 一 價 定
錢 二 十 料 送

終